

協会
活動報告さくらサイエンスプラン日本・アジア青少年交流事業第3回
中国生物多様性保護及び緑色発展基金訪日団報告

環境省での講義

当協会にとって第3回となる「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（さくらサイエンスプラン）」で平成28年度第1回募集に応募し、採択されたものである。今回は、「中国生物多様性保護及び緑色発展基金会」が主体となるこの分野の研究者訪日団（11人）を6月12日～18日まで迎えた。本分野の中国関係者の訪日は珍しく、環境省自然環境保護局審議官への表敬のほか、

同省の関係者からパワーポイントを駆使して詳しく日本の生物多様性保全活動に関し説明を受け、大変な厚遇であったので中国からの参加者にも多大な感動を与えた。これには当協会の澤村宏会員（元環境庁自然保護局長）の絶大な尽力のお蔭である。

1 中国生物多様性保護及び緑色発展基金

同基金会は本部を北京に置き、中国科学技術協会の認可を受けた社会团体法人であり、専門に生物多様性及びエコロジーの発展を目的とする公益法人である。その発生は中国を原産とする「四不像」（鹿の一種）が8か国連軍の北京に侵攻と永定河の氾濫に相まって、その頃200頭いたものが、絶滅した。1901年英国のベルフォード侯爵が世界中から、2000頭の

四不像を集めて、飼育し、英国で繁殖させた。1985年に38頭を若干の資金とともに中国に寄贈し、ここに生物多様性保護基金会が設立された。それらの四不像は北京南郊の清朝時代に王家がかつて飼育していた跡地で飼育し、繁殖に成功した。さらに2010年に基金会の守備範囲を拡大し、現在の中国生物多様性保護及び緑色発展基金会に改称し、現在に至っている。

2 プログラムの内容

今回の研修団の構成は同基金会の研究員、北京四不像生態実験センターの研究員、北京植物園の研究者、北京科技情報研究所、中国科学院植物研究所等からの参加者であった。

プログラムの内容を検討するに当たり、先方の要望も徴して、編成するわけであるが、一口に

いって「生物多様性保護」ということは地球上の多様な生物種をどのように保護するのかということであり、もちろんこうした地球規模の問題については、政府が極めて大きな役割を果たしているため、行政関係者の話を聞くことは不可欠であり、もう1つは大衆にその意味を理解してもらうために「動物園」「植物園」の役割が必要である。さらにもう1つは今日の社会経済の急速な変化によって、日々多くの生物種が滅亡し、また数は少ないが、新発見される生物種もある。そうしたことを第一線であるいは基礎の部分で支える研究活動が必要であることは言うまでもない。こうしたことを念頭に置いて、訪問先は環境省自然環境保護局において同局審議官表敬の後、別の部屋に移って、①日本の鳥獣保護管理につ



森林総合研究所での交流

いて、②生物多様性保護の国家戦略、③国立公園における生物多様性保全の取り組みについて、各担当の専門官の講義を受けた。その後、小石川の東大理学部付属植物園を見学した。東京は都市の割合に大きな植物園が少ない感じがした。日本は緑が多く至るところが植物園のようであるためかもしれない。他方、筑波の森林総合研究所では日本の森林保護、害獣としての鹿の取り扱い等について説明を受け、当日は雨天であったため、森林園の視察ができず、耐震性のある集材材で建設した木造家屋とその機能（省エネ）を実視した。



森林総合研究所での交流

多摩動物園では休園日にも拘わらず、これも澤村会員の協力で我々だけに開園してくれて、大きな休憩室で本動物園の規模、構成、特色について説明があった後、園内見学に移り、園内見学では飼育課長自ら丁寧に案内していただいた。広い園内、動物と我々だけ、時折すれ違う工事関係者、そういえば今でもここ多摩動物園ではいたるところで大きな獣舎の建設や改修工事が行われていて、都内と同じようであった。

次は川崎市の生田緑地を散策した。雨天に挟まれた当日は天気もよく、広大な緑に包まれた



生田緑地散策

敷地は気持ちよかった。

今回の訪日において中国側参

3 訪日研修と交流活動の効 果そして、今後への期待

16日にはTEPIAを見学した後、善隣協会において矢野会長から参加者に修了証書を手交し、次に報告会では胡京仁団長から基金会の生い立ちと基金会社と協会との関係を述べられた。次いで北京植物園の研究者が北京植物園について説明した。次に報告予定だった、四不像生態実験センター研究員は準備した報告が時間の制約から割愛せざるをえなかったことは遺憾であった。報告会の後、引き続きに会員との交流会を行った。

加者は、政策担当者から、直接話を伺えたことは日本の政策について理解を深めることに役立った。また日本を代表する多摩動物園を視察し、日本の生物多様性保全に関する実際の事業を見ることでこの面でも日本に対する理解が深められたと思われる。さらにこうした日本の行政官または現場の担当者との質疑を通して交流の実を上げ得たと確信する。日本の森林及び森林に生息する動物を研究する研究拠点である森林総合研究所を訪問し、日本の研究者と意見交換をしたことは将来の日中間の本分野の交流の一助となったと考えられる。

中国は世界において、大アマゾン有するブラジル、高原から熱帯まで幅広い自然を持つインド、これに次ぐ第3位の生物多様性規模を持つ。中国の参加者が帰国後、日本で知見あるいは経験したことを自国の生物多様性保護活動に役立てて欲しいものである。（八島継男）